

# 京都文化力向上宣言

京都文化力プロジェクトをより発展させていくために、京都文化力プロジェクト実行委員会の関係者等から、これからの京都の文化力をさらに向上させるためのメッセージをいただきました。

(敬称略)

## 村田 純一

公益財団法人 京都文化交流コンベンションビューロー 理事長  
古典の日推進委員会 会長  
京都文化力プロジェクト実行委員会 理事



一千年前、山紫水明の平安の都に「源氏物語」が誕生し、近年では二十余の外国語に翻訳され、世界各地の人々に感銘を与え続けています。

2008年11月1日、国立京都国際会館において平成の天皇、皇后両陛下のご臨席の下、源氏物語千年記念式典を開催するとともに、この11月1日を「古典の日」として宣言いたしました。

その後2012年に古典の日に関する法律が施行されることとなり、2015年開催の「琳派400年記念祭」をはじめとして、京都の優れた文化的所産を積極的に国内外に発信してまいりました。

一方で、京都に広く世界の文化や知見を招き交流を広めるべく、国際会議の誘致・開催にも取り組んでおり、2019年に国際博物館会議や、国連観光・文化京都会議が開催されたのは記憶に新しいところです。

今後は、京都へ移転する文化庁とも一層の連携を図りながら、国内外に「京都」の魅力を発信し続けるとともに、世界との交流の場をよりいっそう設けることを通じて、京都のさらなる文化力向上のお役に立ちたいと考えています。

## 青木 淳

京都市京セラ美術館 館長  
京都文化力プロジェクト実行委員会 特別委員

建築の設計をしていると、2つの思いに引き裂かれる瞬間がときに訪れます。この案ははまだ体験したこともないまったく新しい世界だ、という思いと、それとは逆に、この感覚はずっと昔、誰かが体験した感覚だったという思いとにです。京都市美術館の再生のために設計しているときにも、そんな瞬間を何度となく体験しました。なにしろ今から80年余り前、実際その建築の現場では、金工たちが扉にすばらしい細工を施し、また左官が漆喰で丁寧に持ち送りを造っていたのですから。かつて職人たちがそこで嗅いだはずの未知の世界と、いま自分の前に拓けつつある未知の世界が重なり合って、響き合う感覚のこの不思議な体験。京都という町がそういうやり方で、伝統を更新しつつ紡いできたことに、今さらながら思い当たります。美術館とは、ものを「つくる」という人間の側面とともにある機関。加速度的にせわしなく条件反射的な反応ばかりが溢れる現代のなかで、ものを「つくる」ことの本源であるその体験の貴重を守り、さらに広げたいと思っています。



## 熊倉 功夫

一般社団法人 和食文化国民会議 名誉会長  
MIHO MUSEUM 館長



伝統というものには、ある困難に直面した時、それを乗り越える力があると感じます。京都に息づいた伝統文化の一つである茶の湯は、明治維新による京都の地方化という現実を乗り越え、昭和初期、新たな家元制とともに復活を遂げました。重要なのはその時、従来とは異なる機能・組織を作り出しているということです。時代の要請に応え自己変革することで受け継がれてきたもの、それが伝統文化なのです。それらが秘める目には見えない“文化力”は、広く社会に発信することでこそ、培われていくものなのだろうと思っています。

日本文化を受け継いでいく上では、まず、形ではなく精神を伝えるという発信者の意識、それを感じ、素直に楽しむ受け手の姿勢が大切です。そして人生100年時代に向けて、さらに変革していかなければなりません。高齢者の方、障害のある方、外国人の方も、誰もが公平に享受できる形を創造し、文化に触れる一人ひとりにとって、それぞれが抱える困難を乗り越える力となるような存在へと進化させていきたいと考えています。

## カズコ・ザイラー

ピアニスト



京都は長い歴史の中で多様な文化が育まれてきた日本文化の代名詞ともいべき都市です。そうした数ある伝統文化の中にあつて比較的新しい芸術文化である西洋音楽も豊かに育む土壌が、京都にはあります。音楽の専門課程のある公立大学をはじめ、いくつもの音楽が学べる大学の他、京都市交響楽団などが活躍するのもその一端です。私自身も南丹市にコンサートホール「かやぶき音楽堂」を建立し、同じくピアニストだった夫と共に世界中で演奏活動を行いながら、初夏と秋に「かやぶきコンサート」の開催を続けてきました。大切なのは、過去の文化を守るだけでなく、未来に向けて文化をさらに発展させていくこと。そのためには次代の文化の担い手を育てるとともに、地域の方々が文化や芸術に触れる機会を増やす必要があると考えています。コンサートに足を運び、生の音色を聴く感動は他に代えがたいものです。ぜひ国や行政を含め、地域を挙げて芸術・文化を応援し、その感動に触れる機会を増やしていただければ願っています。

## 向井 久仁子

向井酒造株式会社 杜氏

日本酒の醸造元に生まれ、物心ついた頃には、毎年冬、兵庫県の温泉町から杜氏さんが来て住み込みで酒造りをする光景がありました。その頃から職人さんの世界が好きで、歴史あるものに惹かれていました。転機は、父親の強い希望で進学した大学の醸造学科で、竹田正久教授のいる醸造微生物学研究室に入ったこと。「これからは話題性のある酒造りをしていかなければならない」とおっしゃる竹田先生のもとで酵母作りから酒造りを経験し、日本酒を造る喜びと探究心が生まれました。向井酒造に就職後も、先生から学んだ「新しいことに挑戦する心」を大切に新酒開発にも力を入れてきました。その一つ1998年に造った「伊根満開」は2020年の今、海外にも輸出し、当蔵を代表する日本酒になっています。

昔ながらの清酒造りや文化を守りつつ、同時に新酒造りに挑むことは、酒造を続けていくために大切な事だと思います。日本酒は日本の文化の一つです。私も先人が残してくれた文化を大切に学び伝えるとともに、新しいことに挑戦する楽しさも伝えていきたいと思っています。

